皇国度制考

上

839
2
51

国立国会図書館　タイトル『皇国度制考 2巻』 請求記号 839-51

ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『皇国度制考 2巻』 請求記号 839-51

ガラス使用

曹山文庫

根岸信補氏寄贈

国立国会図書館　タイトル『皇国度制考 2巻』 請求記号 839-51

ガラス使用

と相ともに国家をうちたてられ者
事の全く大人なり。此の度制の考
文よ。天地の始を天津神と云
もちて。二柱の大神乃。淳在国と。
修理固成事業。終りて高天
原を立て。大御神と。大御史
なるべし。国の御柱と法則とを。

我国の歴代を考て事業をつくり
現る。高尊。遠祖。廣祖。七種と。
成りものなる。物の始の形
おと。高天原も。歴代の元義の。
その高天。皇祖。皇祖母。
其他。皇孫。天孫。
別の。豊葦原。

国立国会図書館　タイトル『皇国度制考 2巻』 請求記号 839-51
ガラス使用

[illegible]
[illegible]の人[illegible]て[illegible]世の[illegible]力の[illegible]義[illegible]
[illegible]大人[illegible]て[illegible]
[illegible]古史[illegible]書[illegible]
[illegible]

[illegible]
[illegible]
[illegible]

心をなやましうるがいうそうぶ學人
ぶ。事に依ぶるぶ。ぶまぶぶあるを
まぶ。天ぶ山ぶ屋を押ぶらて。
大日靈神の大師光ぶ輝き
出ぶ。たまぶ。ぶまぶぶうたぶえ
しあまえん。まぶ法ぶ法ぶあふ
えしぶもぶ。ぶて。こそ上ら

ぶ。下のふまて。飲食衣服住宅
ぶて。貧窮ぶ代乃なて。ぶあふ
ぶた。大神ぶ神ぶ長ぶ。倩ぶ長き
大陽ぶを。ぶを。ぶ。ぶ。ぶ。ぶ。ぶ。
ぶふぶふぶふぶ。ぶ。ぶ。ぶ。
ぶ。ぶ。ぶ。ぶ。ぶ。ぶ。ぶ。
大人のぶ。ぶ。ぶ。ぶ。ぶ。

国立国会図書館　タイトル『皇国度制考 2巻』　請求記号 839-51
ガラス使用

堂に居まるまで。国歌とはあり
なん。そもそもいかなる物ぞ。いかなる
負ぞ。かなるべきことぞ。今し状
文ぞ。事なきと宣へば。立川の
いとのしるべ。その状載せつるもん
るべきと。なれつるもの。そのあ
まと。国体とは。心ばえなん事

物世も。本国はやとるべし。罪
はかなきと所為なり。あ那も兵。
なれ有まれ有まと。作もと徒世れこそよ
るまと。雅俗の事は。古れ
ばまてそこの物語。と。言あさ
又国歌山は井の。湖れさりし乗
ふ事と。時を世はし事れ

国立国会図書館　タイトル『皇国度制考 2巻』 請求記号 839-51
ガラス使用

皇国度制考上巻

應輪池屋代翁需　平篤胤謹撰
門人　宮崎大門　久保篤見　同校
八劔興壽

宮山文庫

皇大御国ゝ御度の本はしも。言はれも綾ふ畏ゝ天皇祖神の。大御體ゝ御丈を度ゝ給ひ摸し給ひし天瓊矛ゝ伊邪那岐伊邪那美二柱神み賜ゝ矛。二柱神。淤能碁呂島ふ衝立て。国中の天御柱ゝ爲給ふ。天御量柱と申せるゝ始まりて。其御度ゝ制ふむ。天太玉命の御末。齋部首の家ゝ傳はゝ來し。世ふ布須らし給ふるふて。即今ゝ世ふ弘く用

国立国会図書館　タイトル『皇国度制考 2巻』 請求記号 839-51
ガラス使用

ふゝ。鐵尺ゝ云ふ度おむ。神世ゝ天御量を。失さゞ傳ゞ以來
し物ふぞ有ゝゝゝ。然るを此おゞゝ。源弘賢ぬし。狩谷望之ゞ
著せゞ。本朝度攷と云ふ書ゝ攜へ來はゝて。此おむ如何と
問ゝ。ふ。此ゝ前ゞ已ふも見せて。思ふ旨あらば。聞むゝ
有ゝゝゝば。我ゞ意と差ゞ節くゝを何くれと書ゝゝて。贈ゞゝ
侍めし。其後ふ。おゝ潭く思ゞば。ゝれ望之ゞ說はしも。王
桙の道の紀亂る。忌じき非說みて侍ゞゝゆゝ答ふゝふ驚
かして。爭で其由を書調ゞて。示せ給へと強らるゝ。默止
あゞゞ。此事ふ筆ゝゆ初むゝふ今日ゝ日を幾日と問ゞば。神
無月の二十日餘ゞ五日ゝ云ふ日ふれも有ゝゝゝふ人はゝし

加ゝふおくゝも我ゞ杖はゝやはと島根ふ立むゝゝぞ思ふ。
古事記云。於是天神諸命以詔伊邪那岐命。伊邪那美命二
柱神。修理固成是多陀用幣流之國。賜天沼矛而言依賜也。
故二柱神立天浮橋而。指下其沼矛以畫者鹽許袁呂許袁
呂邇畫鳴而引上時。自其矛末垂落之鹽累積成島。是淤能
碁呂島。於其島天降坐而。見立天之御柱。見立八尋殿。云く。
此ふ謂ゝる。天神諸ゝゝ初發ゝ御名ゝゝ出はせる。天之御中
主神。高皇產靈神。神皇產靈神。三柱を申せゞ。卽天皇ゝ天皇
祖神ゝゝゝふ坐おゆ。○命以ゝゝは。御言ゝゝ以ゝゝゝ云ふふ同じ。
○是多陀用幣流之國とゝ。神代紀一書ふ。天地初判。一物生

国立国会図書館　タイトル『皇国度制考 2巻』 請求記号 839-51
ガラス使用

於虛中狀貌難言をあ㐂物を云ふ。其狀を言ひ難しを傳ふしは。玄牝ハ象ある物あるとし故ふ。憚りてれ。赤縣州ふも此傳有りしこを。老子。まさ列子ヲ出ある黃帝書ヲ。谷神不死。是謂玄牝。玄牝之門是謂天地根。と見え。地字を作るふ。女会の象形さる也。字を。土ふ从ヲさるを以て知べし。○天沼矛は。神代紀ヲ。天之瓊矛を書れあり。其質ハ玉ふて。天根玄牝の象ある物ふり。○天浮橋を。まさ天磐船をも云ふ。神等の乘て。天地の間を。上下し給ヲ㐂物ふり。赤縣籍ふも。三五歷記ふどふ。人皇乘雲祇車出陽谷と云へる類の古說多ふの㐂ハ。即是ふおふど。○畫ハ攪ふり。畫鳴ハ攪成ふり。二柱神。かく爲給ヲ㐂御矛の末をり。垂落れる潮の。自からふ。凝積りて成る島ふ㐂故ふ。淤能碁呂島を云ふ。この㐂御矛ハ。玄牝の象ある物れるさを。是ふて知る㐂し。續博物志ふ引ある孔子の語ふ。乾動也直。靜專。坤動闢。靜翕。其根也天根。毎日兩度蹴入尾閭巨壑。則海沸出潮を云へり。此ハ索隱を好まぎ。と立さる人の按ふ出べき語ふ非ぎ。其本は。必ぎ古傳の殘を㐂者れる故ふ。熟くも此の古傳ふ叶ヲり。潮汐乃說ハ。世ふ種く聞ゆる中ふ。斯ぢのり實理ヲ叶へる說ハ有ふを。ふし。尾閭巨壑をハ即黃帝書ふ謂ゆる。谷神玄牝の門を云ふ。列子ふ。渤海之東有大壑焉。實惟無底之谷。其下無底。名曰歸墟。八紘九野之水。天漢之流。莫不注之。而無增減焉。と云へる是ふり。其中ふ。蓬萊。方丈。瀛洲ふどの三神山有ヲと云㐂ハ。即神典ふる海神。宮ふて。荒塩之。塩乃八百道乃八塩道之。塩乃八百會と有るハ。即此大壑を云へり。○天之御柱を。神代紀。正書ふて。國中之柱。柱此云美敞旨邏。を。あり。唯同じ物ふて。即かハ御矛を。衝立給ヲふり。然ぎど舊事紀ふ。以天瓊矛。指立於磤馭盧島之上。以爲國中之天柱也。を見えさり。旧事紀ふ有れど。此ハ古說ふる㐂を。下ふ引く。私記の古說を見て知るぢし。

国立国会図書館　タイトル『皇国度制考 2巻』 請求記号 839-51
ガラス使用

た。大御国は中央の柱を云義なり勿論ふる。謂ゆる土圭の本
れりを思ふ由あり。於能碁呂島の辺を。皇国域内は中央ふ
て。漢籍ふ謂ゆる。天地之所合也。四時之所交也。と云べき所ある。地理の眞測
量を得さらむ人は。必ず知りてぞ有べ。其は次々ふ論ふ
べ見て知るしぢて是を以た。古語拾遺は。度量ふ關る條々
を舉て。本文を爲し。ふ本前條をも取統て。委曲に論辨せる
ふを左は如し。

其後素戔烏神。奉爲日神。行甚無狀。于時天照大神。赫怒入
于天石窟。閉磐戸而幽居焉。爾乃六合常闇。晝夜不分。群神
愁迷。高皇産靈神。會八十萬神。於天八湍河原。議奉謝之方。
令太玉神率諸部神造和幣。令手置帆負。彦狹知二神。以天

御量。大小量。雜器等之名也。伐大峽小峽之材。而造瑞殿。古語美豆乃美阿良可。
兼作御笠及杙楯。令天目一箇神作雜刀斧及鐵鐸。古語佐那伎。
此條。率諸部神造和幣と云までは。今は改ふ。要を別き事
等は。省略して出せるふ。太玉神は。高皇産靈神の御子ふ
て。乃古語拾遺の撰者。齋部宿禰廣成は遠祖ふり。諸部神を
は。是を前文ふ。太玉命。齋部宿祖也。所率神名曰。天日鷲命。阿波国忌部祖也。
手置帆負命。讃岐国忌部祖也。彦狹知命。紀伊国忌部祖也。櫛明玉命。出雲国忌部祖也。
作祖也。天目一箇命。筑紫伊勢両国忌部祖也。を有依を云ふ。此諸の忌部
氏を率ゐし故に。太玉命を以て。其家代々は。忌部首と云しを。
後ふ宿禰の姓とは爲きり。其は天武天皇の御世ふ改た。和幣をは。此ふて

国立国会図書館　タイトル『皇国度制考 2巻』　請求記号 839-51
ガラス使用

た神ふ奉ふ諸物を云へ。太王命は。諸忌部の首ある故ふ。此五神を率る下知して。事を執行ひし形ゆ。此事ふほ委くは古事記。神代紀を也。合せ見て知るべし。手置帆負命。彦狹知命二神は。世ふも番匠の祖神也。以齋く神等ゆるゞ。木を伐ひて。宮を造ふ事は。高天原ふて。此時大御神の新宮を始ふる。然るは世の初發ふ。既く伊邪那岐大神は。八尋殿は有きど。其は次ふ言ふ如く。化作し給ふるふて。木を用ひざる事を見もれど。今云ふ限ひふ非ず。まと高天原ふは。此時の新宮を。ひ前ふ。大御神は宮は有しゆゑ。其はと化作ふて。木は用ひゆと見え為ゆ。此等の事ども。ふゆ委くは古史傳ふ云へるを見るべし。ちて天御量ゆは。廣成宿禰は自

註ふ。大小量雜器等之名也ゆと云へし如く。謂ゆふ度量權衡の。大小雜器ゆも。ゆ言ふ。先師の。紀伊殿ふ。此書は義を聞え白ちきし時ふ。本ふ書入らきし說も。是と同じ。拾遺の本文と有る以。字は。或本どもふ。作ゆ書為ふも有れど。其はわろし。まと注文ある大小量は。諸本ふ大小斤と有きゆ。旧事紀ふ。此文は取きふ。大小量と有るふ依れゆ。此は斤量とも。ハカリと訓む字ゆる故ふ。後人ゆく。斤ゆ謙まゆむを。旧事紀ふは。其謙ある本を取りきと所思れゆ。先師の說は。通本の大小斤とある傍ふ。秤はみふ非ず。重輕外合尺長短は名。ハカル者は總名也と有ゆ。其和幣と奉ふ種々の物は。長短輕重多少を調ふむ為の設けゆ。其は度量衡は異有きゆ。共ふ諸物ふ量る器ふ故ふ。總ふ御量とは言ふゆ。然れど其ゞ中ふ。尺度は主さる物ふ。其は度制まは定はりて。量衡は是と出れゆ。況

て此は宮造ひし事を云ふ所おれど本文の御量は尺度を主とせるおゝ論ひ形し斯てそ我天御量と云ふを思ふべ天皇祖産靈大神の制給ふ御度れるこゝ云も更おひ其た出雲風土記て大国主神の宮造ひし事我載して神魂命詔五十足天日栖宮之縱横御量千尋栲縄持而百結〻八十結〻下而此天御量持而所造天下大神之宮造奉詔而御子天御鳥命楯部爲而天降下給之ゝ所ひ此事を神代紀ふた高皇産靈尊敕大己貴神曰汝應住天日栖宮者今當供造即以千尋栲縄結爲百八十紐其造宮之制者柱則高太板則廣厚と記されひ古文をおひて漢文ふ作らゝと雖る文れれど其義少〻通え難し御量し千尋栲縄ゝは墨縄を云ゝ本をゆふて其丈尺た天神の定め給ふ御度れる

故て かく言こゝ下文ふ此天御量持而云〻と有我も思ひ合せて辨ふ弘し 説後れさゆ天御鳥命とた彦狭知命し示名と聞えさひ其た楯部ト爲而ゝ有ふて知べし ちて本文の伐大峽小峽之材而ゝあふ材而の間て決免ゝ立齋柱と云ふ三字ひ落文あひ其は垂仁天皇ひ御世ふ伊勢の伊須〻原ふ大御神の宮造ゆ給ふる其御制た もは ゑ此時の新宮造ひし故實を追給へふ御事ふるゞ其宮の眞中ふ立る齋柱と申ゑ御柱あゆ此た大宮の主さふ御柱て ゑて倭姫命世記ふ始免て ゑひ大宮を造ゆ給ふ條ふ齋部之齋鉏乎以天齋柱立 一名天御柱 一名心御柱 高天原尓千木高知利 下都磐根仁大宮柱廣敷立天照大神並荒祭宮和魂宮止

国立国会図書館 タイトル『皇国度制考 2巻』 請求記号 839-51
ガラス使用

奉鎮座云々。とある御柱是ゐ。此も倭姫命世記よも出されど。本は大同本記逸文ゐ云ゐ。斯て此御柱の文ゐり。其由も。別ゐ著せ侯。大同本記の一名ども。延暦儀式。延喜式。まさ宝基本記。御鎮座本記。心御柱記ゐどの諸書。互ゐ出入あれど。普ねく見えさ。○ちて是御柱はゐと。延暦の内宮儀式よも取。吉日爲正殿心柱造奉。杣木本祭。其柱名號忌柱。右祭告刀申。忌部宿祢。其忌柱造奉畢。自杣出前追運來。置正殿地也。地祭畢時。地祭物忌以忌鎌宮地草苅始。次以忌鋤宮地穿始。奉祢宜大物忌波。忌柱立始。然後諸役夫等。柱堅奉と有り。但し此も畧文ゐ。委くも本書を見べし。此は唯。大御神の宮ゐ礼み立るゐ非ず。天皇礼大宮。まゐ大嘗宮ゐも。立給ふ事ゐて。其はさ齋部氏。代々の職掌ゐ。其も大殿祭礼詞ゐ。以天津御量氏。皇御孫之命乃御殿乎。今奥山乃大峽小峽爾立留木乎。齋部能齋斧乎以伐採氏。本末乎波。山神爾祭氏。中間乎持出來氏。齋柱乎立氏。皇御孫之命乃。天之御翳。日之御翳止。造奉仕禮留瑞之御殿乎。云云と有ゐて知べし。まさ唯天皇の大宮礼ゐ非ず。顕宗天皇紀ゐる播磨国司。來目部小楯と云もして。其屋ゐ坐して。室寿し給ゐる御詞ゐ。築立柱者。此家長人の新室ゐも。然侯柱の立さること。即天皇礼遠祖命を申御心之鎮也。と宣ゐ侯ゐて著く。まさ万葉ゐ。眞木柱太敷座と作きる云く。眞木柱太心云く。風ど詠るをも思ふゐ。下方みも。其ゐ擬ゐ侯柱を立しこと知ら侯。即今世までも。大極柱と云もの。其名残ゐとぞ聞も。伊勢の神宮。天皇礼大宮とも。本文形る天神世の。新宮造りを方制と云給ふゐ。其宮々ゐ齋柱あ侯。其根元ゐ侯。其新宮ゐ。其御柱ゐれて有ゐ。大殿祭詞を相照して。本文ゐ。立齋柱の三字を脱せ侯こと著明ゐり。斯て。伊勢神宮礼齋柱乃事。御鎮座本記ゐ。心御柱。一名天御柱。示名忌柱。示名天御量柱。徑

国立国会図書館　タイトル『皇国度制考 2巻』　請求記号 839-51
ガラス使用

四寸長五尺御柱坐以五色絁奉纏之以八重榊奉飾之是則伊弉諾伊弉冉尊鎮府会易變通之本基諸神化生之心臺也。と記せり。まゐ宝基本記心御柱記れどもこれ此四名を挙て是則一氣之起天地之形会易之原万物之體也故皇帝之命国家之固富物代千秋万歳無動下都磐根大宮柱廣敷立称辞定奉焉とあり世の青生ふる学者ども此等の諸書をば一向ふ偽書あれぞ取るに足らぬと言ひ詈るに其面ふ古そ目は有き和漢の古書の眞偽を熟く読辨ふる眼精のおのれ薄くれぞあゆ故考ふるに御柱の示名ぞもに本を正古傳れる古を著く以八重榊奉飾之と云までは其大宮人の現ふ見行ふ所を以て云へる言ふ多今も其狀を差ぬ由あれば是に論ひき事れ多ゞ其をり以下も語こ扶赤縣風れを太古の本義を傳ふ法説ふて則伊弉諾伊弉冉尊鎮府ぞは

神宮ぢ齋柱に即二柱神の彼御示を衝立て天之御柱と見立給ふ法ふ則正て立る義ふて實ふも彼御柱に鎮府ありし故了国中之御柱ぞも云し形り然に有れかゝ法靈妙の事は去も容易く世人ふ知去ぬ給はぬ此頃までの神意ふ正しの古典ふ其精説ぢ傳へふく僅ふ右ぢ本記ふかく傳ふ去耳れ正是多以て古今ふ一人も是淡義ぢ覺り得る者ふ法事ふし。哀き此本記多作れる人に代本記といひ示名多飛鳥の御世了外宮大神主飛鳥と云し人の記ふる由を云ふど永仁四年の皇字沙汰文ふ其名始めて見えて其をに以前ふ皇字れ議論の用意了記し貯ふる物と見もるゞ外宮豊受大神を天之御中主神ありと誣れて内宮天照大御神れ上ふ立むと搆ふし作意ふる事に其に けし措て中ふに実ふも飛鳥ぞ云し人の世頃ふ書傳

国立国会図書館　タイトル『皇国度制考 2巻』 請求記号 839-51
ガラス使用

アし古説おらざは有はじく。絶て他乃古書等ラ傳はらざ
ル明説。古〳〵に有る歟。已悉れ拾ひて。考へを加さる説等あゆ。
其も一二の偽説を見得れず。全を偽説と定むし。然れど假令
ル類の学者れ。都て得知らぬ事どもあゆこし。
古典ふ。そ此精説も無しをも。今ゑも如此。吾ゲ見の開け故
る事。神の許し給ふ事を所思ゆ。右の説を考索ル本基
と云て。赤縣の古書を合せ攷ふるラ。先河圖括地象ふ。崑崙
山爲天柱。氣上通天。地之中也。地下有四柱。柱廣十万里。有三
千六百軸。互相牽制。名山大川孔穴相通。四柱を元本ふ八柱ラ誤れり。今ゑ河図始開図ヲ依テ改め故。はさ崑崙之山應于天。最中爲地首。上爲握契横
爲地軸。上爲天鎮。立爲八極。從廣万里。高万一千里。神物之所
生。聖仙之所集也。ル。ど有ア。此文ども。古微書を始め。諸書ラ引さる文の。此ゴ要ある所の

み歟省略して引さゆ。二書とも。其全書ゑ傳はら。祢ど。其
古文ゑ。夏禹王の水を治ゑし時ル書ありと。王充ゲ論衡ふ
見え。越絶書ふゑ。蒼水使者と云ふ海神を。授ゑる由を云アゆ。是昆侖山と。四柱を合せて。
此を五岳を謂ふ。其は岳瀆名山記ふ。東嶽廣桑山在東海中。
青帝所都。南嶽長离山在南海中。赤帝所都。中嶽崑崙山在九
海中爲天地心。西嶽麗農山在西海中。白帝所都。北嶽廣野山。
在北海中。黑帝所都。右五嶽皆神仙所居。五帝所理。非世人之
所至也。を有る五岳是ゆり。其青帝。赤帝ゆを有るは。風火金
水の神等歟云ふ。其ゑ五行大義ふ。孔子曰。昔丘聞諸老聃云。天有五行。木金水火土。其神謂之五帝。在地爲五方。其鎮爲五岳。物理論云。鎮之以五岳。と見えさるゆて知るぢし。斯て此五岳歟立ある神
を。漢武帝内傳ふ。西王母ル語ふ。昔上皇清虚元年。三天太

国立国会図書館　タイトル『皇国度制考 2巻』　請求記号 839-51
ガラス使用

上道君下觀六合瞻河海之長短察丘陵之高卑立天柱而安地理植五嶽而擬於鎮輔尊蓬丘館眞人方丈之阜爲理命之室云々ゝ有り。まさ東方朔が十洲記にも此と同じ説を記せり。然て蓬丘とは蓬萊山を云ふ。三神山の一ッにて。即海神宮を云ふこと。三神山の餘考ふ。委く辨ずあるを見るべし。是太上道君を云ふ。列子に。大壑底にある。三神山に事城云へる所ふ。帝と有るを同神にして其を五行大義に引さ依諸書。あ隋書の天文志に載せる。張衡が語あるを。天皇大帝を云む。即謂也依三皇の。天皇氏ふ依由云へるは。實然依事ふて。其在世中に履歴を聚め考ふるふ。西土を皇国と。其傳の精麁こ我有を諦ふ伊邪那岐大神と同神あふこを。火を見る如く炳焉ふに。上ふ括地象を引あるをり。此に至りて。赤縣太古傳。天柱五岳餘論あどふ記せる考ずの大畧ふり。ふれ委くは。其二書を見るべし。ちて其植さ依五岳の中ふ。東嶽廣桑山を云へ依は。即神典ふる。淤能碁呂島ふることを言ふも更ふれば。即五鎮の一ふる故に。太古を彼御柱は。二柱神の。国鎮を此柱と云む傳ず。其意は得て。御鎮座本記ふ。神宮ふ依忌柱を。二柱神の鎮府ふ則を。とは書さ依ふり。斯て其忌柱を天御量柱を也申せ依ふ准ずて。天上にある本宮の忌柱をも。ふり申して。元をり彼二柱神の八尋殿ふる。天御柱ふ擬ずし事の著明に知られ。亦かに此淤能碁呂島ふ立給むし御柱は。天御量に根元さる事をも知さり々ゝ。甚く彼本記を憎む人々も。心を平ふして熟く思ふべし。彼書を作れる當

国立国会図書館　タイトル『皇国度制考 2巻』 請求記号 839-51
ガラス使用

時いうて已ゞ今考ふ如き彼国の古書ふかゝ事ども有てふ事を知りおむや然る考へ無らむ人は古説を知らずた絶て云ひ得はじ此語あるをや斯て思へば彼賜矛ぢし天瓊矛は天皇祖神の定給むし御度の長ふて此を以て彼言む難き一物を畫成て未だ国基を作し固め是ふ因りて夫婦の道を知し始然て国中に御柱と爲し諸物の度を量る法をも是を起ちし始給ふ實代ふて土珪に原ふゞ故ふ御量柱と申ふこ様土珪の事た下ふ委曲ふ説くを俟べし ちて其御矛の長た畏き天皇祖神の大御體に御長を度ぢ給ふて其御手に一尋ありし故ふ二柱神そ規制と爲て八尋殿を化作給むし事とぞ想ひ奉らふ其尋た決て後に一丈ぞ御坐

ふたゆて長短の品く有るものふて一橈おらぞ我等中人の身規量るふ兩手を廣げさる中指の末より中指に末までを度れる尋と頭の凶會をより足心までと同じ度ふ物形る規思ひ合ふ考し故是を以て神世の矛は是ふ則ぢて其長を必ず一丈ぞ定給て其を尋矛といむ神等の国造り巡ぢ給ふふ必ず其尋矛を御杖ぞ於ふ給ひし故ふ此をやゞふ都惠ぞも言しあり神等の矛規御杖ぞ執せる事は大物主神の海を照て歸來ませふ時ふ天蕤槍を執ふ古ぞ舊事紀ふ取る古文ふ見え常陸風土記ふ布都大神の平国に時ふ杖給ひし伊都の仗あり大倭神社注進狀ふ傳聞八千戈神者大己貴命以廣矛爲杖令撥平豐葦原中国之邪鬼是時大己貴命號曰

国立国会図書館 タイトル『皇国度制考 2巻』 請求記号 839-51
ガラス使用

八千戈神と見え神代紀ふ大己貴命即以平国時所杖之廣
矛獻皇孫曰吾以此矛有治功皇孫若用此矛治国者必當平
安云〻此御矛は即大倭神社の相殿ふ坐る八千戈神の
神體とおし奉るおと彼注進狀ふ委く見えさ也ま
と古事記仲哀天皇段ふ神功皇后韓ゑ言向け竟て還ア給
ふ所ふ以其御杖衝立新羅王之門と有る同じ事ゑ日本紀
ゐは以皇后所杖矛樹於新羅王門爲後葉之印故其矛今猶
樹于新羅王之門也と有ふぞゑ以て上古ふ矛を杖といむ
杖やゐて矛より始まる事を辨ふ侍し方葉集の歌ども
伊泥多知云〻玉桙乃道行晩云〻玉桙之道行疲云〻おど
詠るも神等まさ貴人多ちの道行くふ矛を御杖と於き給
ふ故事ふ本於々る歌詞おるぞゑ

ちて大己貴神ゑ於お給むし御矛を廣

矛と云しは尋矛ふ多其長さ一尋おアし故の名れるこぞ
疑ひ無くおは常の矛杖ゑ定れる度ゑるぞ是ふ餘りて彌
長お戈ゑ八尋矛とぞ云々む其ゑ古事記景行天皇段ふ倭
建男命を東方十二道の荒振神まさ伏はぬ人等を言向ふ
遣し給ふ所ゐ給比〻羅木之八尋矛と有る是おり○或人
問云上の本文ふ天御量と有る所ゑ本注ふ大小量を有る
戈大小ゑ度おアぞ云るは實然も有侍く聞ゆれど然らば
其大量小量と云ふゑ何れの度ぞ大量ゑ令ゑ大尺小量ゑ
令の小尺おゑ侍ゐ今世ふ傳はる尺度の品〻有ゑ侍ゐ中ふ何
ぎゐ皇国固有の眞度れ曲ふ其說を聞ゆむ答ふ廣成

国立国会図書館　タイトル『皇国度制考 2巻』 請求記号 839-51
ガラス使用

宿禰は謂ひ依大小量は造營の度あれば則眞度よて。大量は丈度。小量ハ尺度あるが。但し今の大尺は。鋏尺の量とは異ふて。一丈は尺あは非ず。小尺は。小量と同く。鋏尺の一尺也。其度は今世まで番匠等の用ふる。鐵尺とも曲尺とも云もの。卽是ふ。齋部首は家ふ傳はきたる。世ふ弘はきる物あり。其は次〻ふ。說もて行くを見て知るし。

神武天皇建都橿原經營帝宅仍令天富命。太王命之孫。率手置帆負彦狹知二神之孫。以齋斧齋鉏始採山材。構立正殿。所謂底都磐根宮柱布都之利立。高天乃原尓榑風高之利。御戸排弓。皇孫之命乃美豆乃御殿乎造奉仕也。故其裔。今在紀伊國名草郡。御木麁香二鄉。古語。正殿謂之麁香。採材齋部所居謂之御木。造殿齋部所居謂之麁香。是其證也。

橿原は。大和國高市郡あ依地名れ。神世ふ高天原ふて。天照大御神の。彼新宮を造る時ふ。太王命。諸忌部を率ゐ。仕奉し例ふ。ふ。其孫天富命ふ。手置帆負彦狹知二神の裔を依。兩齋部氏を率ゐて。山材を採り。正殿を構立し給へる。あり。注ふ。底都磐根宮柱布都之利立と有るは。卽加ふ齋柱。其は以齋斧齋鉏と云へるを。大殿祭の祝詞を。合せ考へて知法し。故其裔。今在紀伊國。云〻。は。手置帆負彦狹知二神の裔を云ふ。神代紀ふ以紀伊國忌部遠祖。手置帆負神。定爲作笠者。彦狹知神爲作盾者。と有り。て。紀伊國忌部遠祖。と云語の。二神ふ係るを思ふふ。此は御父子ふて。共ふ宮造。諸工匠ふ態を得給ひしあり。

国立国会図書館　タイトル『皇国度制考 2巻』 請求記号 839-51
ガラス使用

其裔の紀伊国に居しは。橿原宮造る時に材を。此国より採し故なり。神名式に。紀伊国名草郡鳴神社。名神大月次相嘗新嘗と有るは。即是二神社なり。国史に。嘉祥三年十月紀伊国鳴神従五位下。貞観元年正月。従五位下鳴神従四位下とあり。永享大嘗會記に。兵庫寮神楯桙立之。件楯桙紀州鳴神社氏人等相論之。経御沙汰之後。祝与氏人相合楯一帖令造進云々と有るは。古例を聞えさせり。

出自。詳ならぬを。其裔なる。木国名草郡に住居して。紀伊国造紀直の祖にて。姓氏録和泉国は天神部に紀直。神魂命子。御食持命之後也と有る。御食持命を同神にぞ有りける。御食の食は。借字にて。御木の義なるべし。即御殿なくる御木に事なり。頭り持なる由に名れり。然るに本文に。採木齋部所居。謂之御木と云へるも此義なり。斯て国造本紀に。橿原御世神皇産霊命五世孫。天道根命。定賜紀伊国造と有る。天道根命は。手置帆負命の三世に当れり。然るに此時。天富命の率ゐ来りしは。疑なくこれ道根命なり。然て木国造に封ぜられて。国造に事なる行なり。仍神代より。由緒のはべるを。名草郡に住す。御木御殿の事。また御笠楯桙なども。造仕奉る。其職號を忌部とは云へるなり。斯て此紀氏より別れし家は。姓氏録に。十四家ばかり載らるるなり。其中に。大家首。高家首なども云ふ姓は。大御家より由れる姓なり。同氏の流と聞るをも。思合に。また工首。神魂命之後也と有る。しかして諸国に国造の多の中より。出雲国造に次ては。此国造に任じ賜ふ儀なり。貞観儀式に載るは。天御蔭日御蔭と

国立国会図書館　タイトル『皇国度制考 2巻』 請求記号 839-51
ガラス使用

隱坐なて。天下を治し看さ。大宮を造る功を。重みし給ふ。
上代ちゆの御儀は。存ぢ傳はきは事を見えさぢ。右等の事ども。あゆ
委くは。古史第五十段は傳を見て知るぱし。ちて天太王命。天富命の末。齋部首は
家ふは。代〻木国の齋部を始め。出雲。阿波。讃岐。伊勢等の国
国は。諸忌部を率ゐは法を。前條は本文ふ所見ゆる如くあ
は故ち。齋部首を姓ふ負て。大宮造り。神事は調度を撿る事
は。其家の職掌さる中ふも。御即位の時ふ。神璽乃鏡劔を獻
る事を。大殿祭は祝詞を。専要の任あぢは。其は本書。今は本
文の末ふ。天皇御即位は事は記して。天富命。率て諸齋部。捧持
天璽之鏡劔。奉安正殿。竝懸瓊玉。陳其幣物。殿祭祝詞。其祝詞文在別

巻。次祭宮門。其祝詞亦在別巻。と言ゑ。は末ふ殿祭門祭者。元太王
命。供奉之儀。齋部氏之所職也。を有ふて知ぱし。天璽の鏡劔を捧ゲ奉る
事は。高天原ふて。天照大御神を高御座ち。皇孫命を即奉
ぢ給ひて。此鏡劔を奉ゆ乃ふ御態を。太玉命の裔ふて。受
行ふ已げふて。此を如く重く。正殿ふ玉は懸け。幣物は陳祢。
其祝詞白ち事は。高天原ふて。彼新宮は造らち〻時ふ。太玉
命の執行む給ふ法事等如るを。其子孫ふて。例のはふ〻
行へるふり。是よゆ後今ふ至はまで。其例を追むて。太玉命
の御裔の。齋部氏は職掌さるぢ。国史及び。儀式は類ふ見えさ法條く。計ふ
ふるふ暇あら。然ぢば延喜
の祝詞式ふ。凡祭祀祝詞者。御殿御門等祭。齋部氏祝詞以外。
諸祭中臣氏祝詞を有ぢて。御殿祭は祝詞。御門祭の祝詞と
もふ同式ふ出ゆ。上の拾遺は文ふ。其祝詞。在別巻。と云るも是ふ。其御殿祭詞は
中ち。そは齋柱を。齋部の齋斧を以て伐採る。を有は。彼天

国立国会図書館　タイトル『皇国度制考 2巻』 請求記号 839-51
ガラス使用

御量もて其度を量ひ造り奉る義ありとて内宮儀式ふ。忌部宿禰其忌柱造奉と有るを相照して辨ふ法し。其御長を心御柱記まさ其餘の諸書にも五尺と有るを心柱長一丈六尺徑八寸廻二尺四寸とも見えて何れ是とも我等も知らず最古くは一丈六尺の御柱にて床の上ふ一丈頭はし六尺も床下土中ふ埋あゆし故後は五尺ふ改めて二尺五寸を床上ふ頭はし二尺五寸を床下ふ埋むべく作りと云ひ伝ひて有れど其れも実の當否は我等が知ざる所ふひあり然るふ廣成宿禰此頃も其古儀此廢れし故ふ愁ひ歎きて末ふ凡奉造神殿者皆須依神代之職齋部宦率御木鹿香二郷齋部伐以齋斧掘以齋鉏然後工夫下手造畢之後齋部殿祭及門祭訖乃可御坐而造伊勢宮及大嘗由紀主基宮皆不預齋部所遺四也ぞ言れ

ふ所實ふも此言の如く貞觀儀式延喜式共ふ大嘗宮を造る所此文ふ造酒兒先取齋斧始伐木然後諸氏下手とのひ。然ぞ神宮ふは尚延暦儀式の古儀を傳ひし故ふ心御柱記ふ忌部一人頭工一人廳宣を蒙ひ木本祭ふ供奉ふ由ふ記して頭工採料木本末奉祭山祇也忌部奉持荷也云く新伎御柱乎本乃御柱乃高仁水量仁任天立奉天水量に御量天御量に依れる高ふ故ふ云ふ。祭物與利先仁守護乃神乎入礼奉天後仁夜々和く良く土乎入天祭物乎埋年云くぞ見えさひ。

御柱を守護ある神の靈代を入る義ふひ其守護神に神祇本源ふ引さ法或説ふ滝祭神ふ与龍田神則同躰異名也故龍田神名号天御柱国御柱是天逆戈守護縁也と有る説見まだ龍田風神ふ坐ひ深き由ある事ふるうも心御柱記

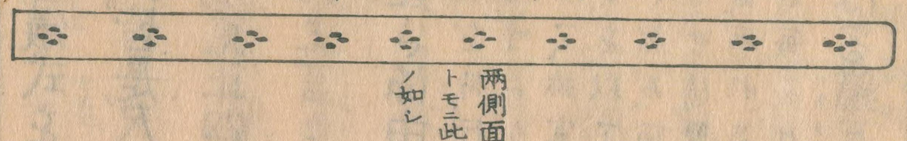
国立国会図書館　タイトル『皇国度制考 2巻』 請求記号 839-51
ガラス使用

は、[redacted]年比頃ゟ外宮比度會行忠神主の記せる物ゟ有り、頭工は内宮儀式ゟ木工長上一人番上工卅人を有る、木工長上ゟて此も疑れく、木国忌部の末流と聞えさゆ、斯をば木工比家くゟ天御量比古制比、傳はり行くる因縁いを著明く況て齋部首さゟ廣成宿禰の家ゟ其古義を傳ゑるむも實ゟ然有ぢき事れを是を以て天御量比下ゟ大小量とは注されゐり、斯てその量を謂ふゞ、即今の鐵尺ゟるこを往古倭姫命そ比御杖代さゆし時ゟを左物乎不移右、右物乎不移左左く右く違事奈久奉仕を掟給ゑる大宮比造營及び御裝束ゟ此尺を用む來をゟゟて論むれし、是倭姫命の御言も、世記ゟ遺をるゞ、大同本記比文ゟゟこと、別ゟ考あを、其

も兩宮比延暦儀式を始め頭工日記、宮殿方制ゟゞゟ、謂ゆゟ丈尺寸分比、皆是尺れゐは更ゟも云ゑ、御裝束乃度制も、此尺ゟゟこを、寛正四年ゟ荒木田氏經神主の記せる日次記ゟ、禰宜等比上言ゟ記ゟて、以往を定はをゟ鐵尺を以る、御裝束を差さゟ由比云へるゟて知ぢし、ゟは此年、大神宮遷宮ゟを事官ら、御裝束を持行て、神官等ゟ渡せる、祢宜等そを度検て制法の尺寸より小き由を、朝廷ゟ申ゟ、行事官よを陳状を捧ゞて、祢宜等の度りさるゟ、例比尺ゟゟ非ゑて、大タカバカリを以て度を比し故ゟ、尺寸短きゟゆ、と云ひし比、祢宜等まさ然ゟゟら、以往よを定はれる鋏尺を以て、度をる由を申せゟ、雙方比沙汰文ゟるゞ、目駄ゟらむ事を思ひて、かく書取れるゟゆ、今も大御神の遷宮比時、奉らるゟ御裝束、まさ毎年比幣帛ゟ、曲尺ゟて度る例れを、ぞ、ちて今傳はる鐵尺乃、古昔ゟ差たぎゟ比ぞ、何を以て知

国立国会図書館　タイトル『皇国度制考 2巻』 請求記号 839-51
ガラス使用

餘枝ニ花鳥ヲ画キタル図ナリ但シ何モ彩色ハ省ケリ此餘枝長サ四寸七分許アリ

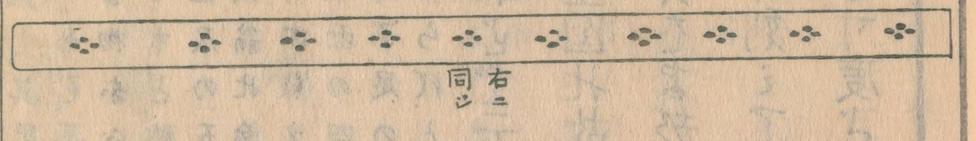


両側面トモニ此ノ如シ

左ニ同ジ

あれど大和国法隆寺ゐ。聖徳太子の納め置給ふと言ひ傳ふる象牙尺と云ふ物ありり。此は寛政四年ゐ屋代弘賢ぬし。彼處ゑ至ると自ら其眞物を摸寫し來られあはば。象牙ゐて制り多。全形を薄緋ゑ絲色ると花鳥を畫き。一寸より五寸まで

五寸ノ刻分カツ其中ニ花鳥ヲ画キタル図ナリ



右ニ同ジ

裡面花鳥ノ図

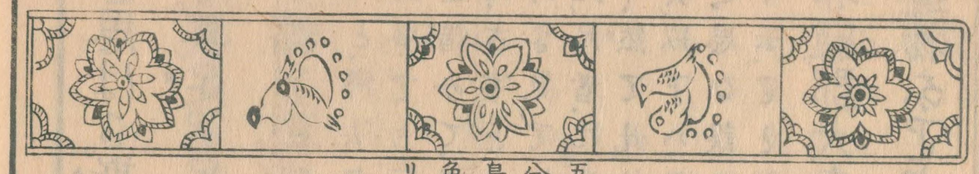
刻めるば。全今は曲尺ゐ合ゐきと。其以下は刻ゐく。曲尺の五寸ゐ三分足らば。上は五寸と合せて。九寸七分あると。其圖かくの如し。律原發揮と云もはゐ。此尺自り魯般家。傳て以至ニ於唐ニ自後聖徳太子傳ニ之ヲ本邦ニと云ひ。三器考驗と云ふ物ゐ。此多世ゐ周尺と称する由を云ひて。此ハ机上の壓尺ゐ造れる物と見も。其長さ御府の古尺ゐ多。一尺二寸五分ゐあさと。外り

国立国会図書館　タイトル『皇国度制考 2巻』 請求記号 839-51
ガラス使用

二釐ばかり強し。其星目ハ無けれども。兩の側ハ。四花の細點各〻二十一あり。其間を五分當ふして。首尺一尺あるを。しふ示しさる物ゐらむ。一端ハ。五段に寸を刻む。是を称して。ち世ハ太子ガネと称して。大和番匠の用ふる曲尺に定本ゐり。其末に。匠尺の五寸ハ非ぢる故ゑ。寸を刻まず。云〻と云へ説を。屋代翁に論ふ。此ハ其図を得ざるも。考索を失せるゐり。側面乃四點を證せむ。今ゆは。正面の寸法以て論ぜべき物ゐゆ。側面の四點ハ其間廣狹不同ゐて。法ともるゐ足らず。元よゆ不足の枝ゐりし故ゐ。六寸以下ハ畫ざりしも知ぢらば。と云はきに。実ゐこれ論説の如し。然ゐふ此を周尺ゐ。尺を云を始め。赤縣物の如く云ゑ法人に多のるは。凡て皇国に故實ゐ疎くゐ。故彼国に尺度ゐも闇しを云ふ。ぢし。其に。ま。故此は古尺の本様を遺せる物ゑて。其面ゐ五寸のみ刻ゑて。其以下略せゐに。五寸を倍しる。尺を知るゐ足ゐ。寸度ゐ得ぢば。分まゐ自らゐ知ゑ。故

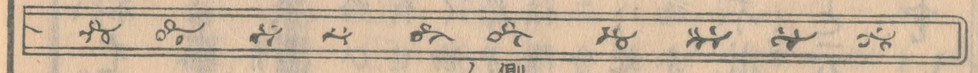
と思はる。斯有れば其餘材に。用ふゐこを無れど。有ゑ隨せて。其足ゐ足らぬゐ抱ゑる事ゐく。共ゐ花鳥に畫きて美觀ふ備ゑ。後來の竈鑑ゑ。納米置せゐ物と見えと。凡を彼太子ハ。赤縣風と。佛法を。甚く好み給ひて。皇朝に故実ゐ悖り給ゑる御事ぞも有しゑど。其固有せる事の。むぞゑ廢れ失ゐむ事を惜みて。後ゐ傳むるべく物し給ゑゐこを。古尺のみ形ら。ば。古字をも。然ゐて遺し給ゑゐと。別ゐ著せる神字日文傳を見て知ゐ。然ゐふ法隆寺古今目録抄ゑ。此尺に事を。此尺者。比番匠等。鉤金短二分と云ゐ。二に決めて三の誤ゐ。ゑ。然て此抄ゐかく云ゐ。此尺唯上に五寸に正寸ゐて。其以下ハ。餘材を存せる物ゐる事ゐ心ゐ。一尺の全形と思ひ誤れる故ゑ。かく云ゐと聞えさゆ。ゐ。此尺を合せ攷ふぢきは。陸奥国耶麻郡大寺村の慧日寺と云ゐ。平將門朝臣に女。如藏尼の遺物ゐを云ふ。璃璃尺を。いふ物あを。屋代翁の摸し藏れ

国立国会図書館　タイトル『皇国度制考 2巻』 請求記号 839-51
ガラス使用



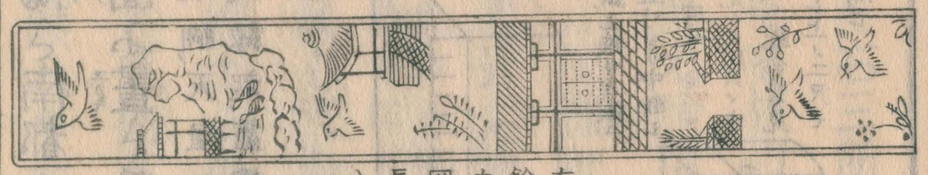
五寸ノ刻分及ビ花鳥ノ図彩色ハ省ケリ

左ニ同ジ



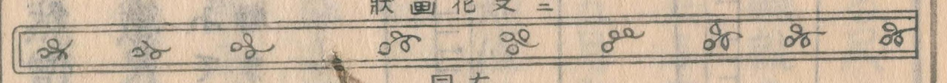
側面ノ図

ちを見るゐ。是も一寸より五寸はで刻ゑるゞ。正ゐ今ゑ鐵尺ゐ同く。六寸以下は刻ゐれ。鐵尺ゐて二分足らゞ。是も枝の限ゆゑ思ゑ法。角をもて制ゑ。面ゐ花鳥ゑ畫き。側面ゐ香草ゑ畫き法樣ゐど。全かゑ象牙尺ゐ同じ。但し背ゐ十二支ゑ畫ゑ。藍をもて綵色せる故ゐ。瑠



右五寸ノ餘枝ニ物ナド画タル図ナリ此長サ四寸八分許リ

裡面ニ十二支及ビ花ナド画タル狀

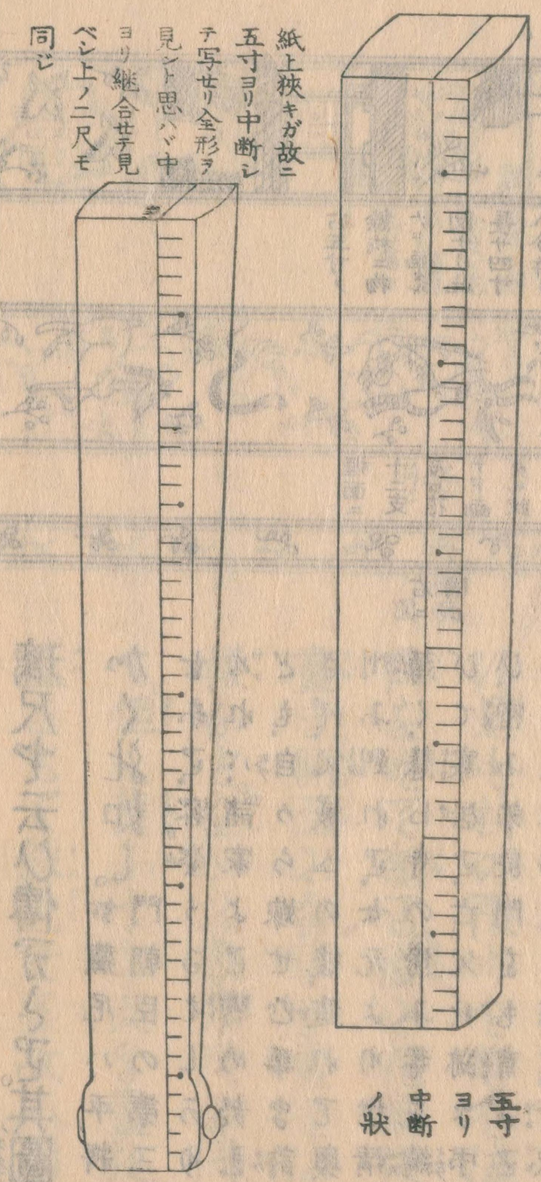


右ニ同ジ

瑠璃尺ゑ云ひ傳ゐ。其圖かく社如し。如藏尼ハ。平將門朝臣の第三女ゐ。容姿うるはしのゆれバ。諸家よゑ聘め。妻ゑ許ども。自ら嫁せむ事ゑ許さゞ。父滅亡の後。遁れて奥州ゐ到れ。女元よゆ世情薄く。慧日寺の傍ゐ菴を結び。寡居。亡父社跡ゑ弔ひ。密ゐ弟良門をも育さ。とぞ。生涯佛道ゑ信じ。行狀正しく。年八十餘ゐ志て。入滅せりゑ云ふ。○鋏胤云。古の尺二種。各く其文樣ゑ寫ゑと雖ども。大凡の事ゐれゞ拘はる可ら。且綵色も用ゐき故ゆ施さ。今ゑ唯其寸分ゑ採きるれみ。

国立国会図書館　タイトル『皇国度制考 2巻』 請求記号 839-51
ガラス使用

はゝ南都の東大寺ゝ凝然僧ゝ持あゆゑ云ふ。小硯匣ゝ側面ゝ畫ゝる尺も全今ゝ鐵尺ゝ同じ。其形かく乃如し。凝然も後醍醐天皇の元亨頃の人ゝて八宗綱要佛法傳通緣起盡露章ゝど云ふ物を著せる法師ゝ已。○



けて右三所各〻ゝ傳はる尺の期せずして今ゝ鐵尺ゝ符合ゆゑ以て其鐵尺ゝ轉訛ゝ知られゝ然きば彼象牙尺瑠璃尺の二ゝ共ゝ皇国固有ゝ古尺謂ゆゝ天御量ゝて續紀ゝ養老四年五月癸酉須尺様於諸国と有ゝ尺様ゆゑ云ふ物ゝ知らむも亦知らでのらば。尺様ゆゑは実の度器ゝ作れるみを非ずして唯尺度の本様を傳ふるまでの器れゆゑ聞ゆる ゝ思ひ合ゆべし。○或人はゝ問云今傳はる鐵尺を天御量ゝ出さゝゝて廣成ゝ謂ゆる大量小量の謂ゆる小尺ゝる古と既ゝ聽得ゝゆ然らば其謂ゆる大尺とは何ゝる尺ゝて何の用ゝ物ぞ答ふ此大尺ゆゑ云を鋏尺の一尺二寸ゝ當る物ゝて其の一寸を則ち一寸二

国立国会図書館　タイトル『皇国度制考 2巻』 請求記号 839-51
ガラス使用

分ふ當れゞ謂ある量地尺。呉服尺。など云も是れり。斯て此尺度の出來し本ハ。神の御世よゞ土生れ長を傳ふさる物ゝ

ゝ。其れ下の二條ゝ說くを合せ考ふべし。

ゝるぢく所思ゝ

今天富命率天日鷲命之孫求肥饒地遣阿波國殖穀麻其裔今在彼國當大嘗之年貢木綿麻布及種〻物所以郡名爲麻殖之緣也。

天日鷲命は阿波國の齋部祖遠祖ふて天孫神世了彼新宮を造る時し毛太玉命乃神及び其子長白羽神を率て穀木ゝ麻とを殖し毛て青和幣白和幣戔令作ふ故ふ太玉命の孫天富命そ祖首ゝ志ゝ日鷲命の孫をも率ゐゐゐ阿波れ即四國の阿波國ふて古事記國生段ふ粟國謂大宜都比賣と有る是ゝり師說ふ粟ゝ美く實ふ國ふふ故ゝ名ゝ聞ゐ求肥饒地遣阿波國と有るゝ思ひ合せゝゝあり。委くは古事記傳を見て知るべし。神名式ふ阿波國麻殖郡ふ忌部神社名神大月次新嘗或號麻殖神或號天日鷲神とあゝ。國史ふ嘉祥二年四月奉授阿波國天日鷲神從五位下貞觀元年正月忌部天日鷲神從五位上元慶二年四月正五位下同七年十二月正五位上天日鷲神從四位下。など見え給ゝり。其御裔の後まで此國ふ住し事れ神祇伯仲資王記ふ建久五年六月十二日阿波國忌部久家還補氏長者角凝魂命之後也と有ふふて知らふ。角凝魂命と申ゝた天之底立神の亦名ふて其御子ふ天石戸別命亦名た天手力男神あゝ日鷲命た其御子ふるゞ故ふ云へるれゝ委くは古史傳ふ云へる

（城見べし）大嘗會の時ゆ。此国の忌部氏より貢る木綿麻および種種の物を幣帛として奉ることを延喜式を始め。其時の儀式を見て知るべし。

天富命更に沃壤を分て阿波齋部率て東土に播殖麻穀好麻所生故謂之總国穀木所生故謂之結城郡。（古語謂之総也。今為上総下総二国是也。）阿波忌部所居便名安房郡。天富命即於其地立天太玉命社。今謂之安房社。故其神戸有齋部氏云々。

天富命はさ更ゆ沃壤を求むと阿波国および齋部氏を分ち率て東土ゆ穀木麻を播殖ゆゑ有るゆ依て神世より昔より思ふゆ。彼新宮造りの時ゆ。その遠祖天日鷲命。その御子等城して穀木麻を殖し給ふ。二物一夜蕃茂也とのたまへり。然るに今のく神武天皇の御世ゆ天富命沃壤を求むるゆ其日鷲命の孫を率往し事は。其遠祖神ちたまへて地理を察し。種種の態を能く傳承知ゆ故ゆ聞えあり。（天日鷲命よく地理を察し。種藝の巳ぢを妙ゆ得給はざらましのば。天故神世あ良むの屋ゆ穀木麻あどの一夜の間ゆ和幣ゆ作る侭く蕃茂ゆべきゆ非ず。此も彼石屋戸段れ故事の中ゆも卓きて奇異なる神功あゆし故ゆ殊ゆ古語ゆ語り傳承し事と聞ゆる城深く思ふゆ。）古語ゆ麻を布佐と云し。総やのゆ生る物あゆ故と聞ゆ。本もこのく総国とて一国れたれる城。後ゆ上下二国ゆ分て上総下総とは為給ふゆ。結城は今も下総国の一郡あゆ。（結城と書さる結も穀木の借字あゆ。）ちて阿波国をゆ率來し忌部

国立国会図書館　タイトル『皇国度制考 2巻』　請求記号 839-51
ガラス使用

氏社所居を爲さ法地れ当る故ふ其地を安房郡と名けし歟。後ふ国ふ建給へ尸。元正天皇紀ヿ養老二年五月割上総国平郡朝夷安房長狭四郡置安房国と見えさる是ゑ。天太玉命社と神名式ふ安房国安房郡安房坐神社。名神大月次新嘗。后神天比乃理刀咩命神社。大元名洲崎神を並法載られ法。二社と聞えさ尸天富命社祖父母の神ふ坐せば必然あ当ぢ支事ふ尸。国史ふ美和三年七月甲申安房国無位安房大神奉授従五位下同九年十月壬戌奉授安房国従五位下安房大神正五位下無位第一后神天比乃理刀咩命神従五位下仁寿二年八月丙辰安房国安房神天比乃理刀咩命神並特加従三位貞観元年正月廿七日奉授安房国従三位勲八等安房神天比乃理刀咩命神並正三位ふど見えさ。安房坐神社と大井村と云ふ在て安房坐大神を申して一宮ふり后神社と洲崎村を云ふ在りて安房社と三里許り隔き尸后神社御名神名式兼和九年の紀仁寿二年の紀共ふ天比理刀咩命と有るを乃字を脱せる

ふり今を貞観元年の紀ふ天比乃理刀咩命と有るふ依りて補ふり其を今も所社古老を日新様を申せばふり我家の系図ふ江戸神田社は此二社ふ大已貴命を配せて將門主の祀ひ初さる由見えさる歟永享記ふ引さる或説ふ文明年中ふ太田道灌安房洲崎明神を祝ひ奉る或人云平將門を神田明神と奉崇とのやとあ尸何ぞ是を知ら支ち て今は二十年前の昔を れ尸ぬ堀尾房守ぢ紹介ふ。太田肇海と云し人尸ぢ門ふ入さふ。其春秋は七十歟越ゑめき。呼名を太田作兵衛と云て御旗本の士ふり此人律度社學を好みて国く出役社先くふて天度日影を測量して表景圖説まさ風聲圖説と云ふ物を著せ尸最も雄くを支大倭心を持ゑ当人ふり志ぢ。其恒言ふ渋能碁呂島を二柱神皇国の中極を定ゑ給ヿ法所ふて土珪の本ふめ皇国ふ早く土珪社法をもて測

量せる事は。古語拾遺ふとて。必今の本文を引文を。沃壤を求めむ事は。此法を用ゐ考る能はぬ事なり。但し其圭の長は。鋏尺は八寸を尺に作れる。大宝令ふ謂ゆる小尺なり。と云れしは邂へり。予の考ふむ。一尺二寸の大尺ならむ。ぞ思ハ侯。と言きしを。然も有むとは聽ゆ〳〵も。已其頃をあほ。尋常は古學者流ふ。赤縣風れる事を。都て忌はしく思ひて。麁略ふ聞棄さ。ひし。漸〳〵ふ學問の力は加ひ來ち。今ふ至りてぞ。實然る語とは。思ひ定らきあり。哀れ此老人。然るいみじき事の。和漢は古人の。絶て得知ら。ぬ深義を。始めて発揮して。右は二図説を著はし。世ふ其方の学び有る人と。ち聞れば。訪往きて語らふ。ふ。誰も得聽入る〳〵人ふく。却りて宇流麻の人は。ち言ぬ如く取成ちきて。世ふ一人も知已ふき事を。常ふ憤ゆ居らきしの。齡は末ま已ゞ許へも訪來まして。講説の日ふも來會ゆ〳〵。相口會ひて。其二図は板ふさ彫さるを。已ゞ何く

れと論ふ旨を用ひて。直し改めむと。自から書そ。ふ。ふ見て。直し賜ゑ。ふ。ふを誹。ふ置きしゞ。其頃よゆ病ゆきて。遂ふ死らきぬ。ゆは。今し此度制考を著ゆ。ゆとして。取出て見るふ。其手沢ふ。ふ新ふ。其面影さ。ふ立そひて。悲しゆど云ふも更ふ。ゆ。已。此人よ。ひ。始て律度の本義を。ち〳〵。此人ま。さ已ふ。ち。ひて。古道は旨をば聞初らきさゆ。然れど此は。我門の友とや云む。教子とや云む。云ゞきゆべを知ゆ。ふし。然るは既ふ云ふ如く。滋能碁呂島ふ衝立給ゑし御示。ち。国中之天御柱を申し。御量柱と。も申ゞ。赤縣の古説ふ。鎮輔天柱と有る。符合ける耳れらゆ。常陸風土記。信太郡の所ふ。普都大神巡行葦原之中津国和平山河之荒梗類。化道已畢。心存歸天。即時隨身器仗。甲戈楯劔。及所執玉珪。悉皆脫履置。茲地。即乘白雲還昇蒼天。と有る玉珪。日影を測ひ。地理を察ゆ。物れきば。神等の巡行

国立国会図書館　タイトル『皇国度制考 2巻』　請求記号 839-51
ガラス使用

し給ふ。此ぞ攜ヲ給ひし古ゆを論ひおし。説文解字ニ圭、瑞玉也。上圜下方。从土。重土云く。珪、古文ノ圭、从レ王ニ。と見え。周礼大宗伯の鄭玄ガ注ニ。圭、鋭象ル春物、初生ニ。祀ニ東方ヲ用フ青珪ヲ。と云ひ。また王執ハ鎮圭ヲ。とある注ニ。鎮、安也。鎮圭ハ者、蓋以テ四鎮之山ヲ爲ス瑑飾ト。圭、長サ尺有二寸云云と有リ。前漢律志ニ。不レ失ハ圭撮ヲ。と云へる注ニ。應邵曰。圭、自然之形。会易之始。四圭ヲ曰レ撮ト。三指撮レ之ヲ。と云ひ。周礼大司徒。以テ土圭之灋ヲ測ル土深ヲ。正テ日景ヲ以テ求ム地中ヲ。とある鄭注ニ。土圭之長。尺有五寸。以テ夏至之日ヲ立ツ八尺之表ヲ。其景適ニ正ニ。與ニ土圭ニ等。謂ヲ之ヲ地中ニ。など見えたり。

然きば天富命ハ。沃壤を求めて。東土を巡行ゐるに。此を用ゐて。地理を察せば古ゆ言ふも更なり。然るに此事はし。赤縣籍の説等よ。能くも符合ひる故に。山海經ニ。青丘ノ国ハ云く。帝命竪亥ニ。歩自リ東極ニ。至リ于西極ニ。五萬十遠九千八百歩。竪亥右手ニ把リ筭ヲ。左手ニ指ス青丘ノ北ヲ。とある筭ハ。説文ニ長ケ六寸。計ル曆數ヲ者。从ヲ竹弄ニ。言ハ常ニ弄ヲ。乃不レ誤ラ也。ゆゑに。測量推歩と云ふ事の。物よ見えたる始めなるべ。されば又。土圭をも持たる事論ひおし。委くは。皇国異稱考に云へるを見るべし。彼国に邊へ

ならふ徒も。彼に倣ひて定むきぞ。我をり視れば。彼處へは此方をり傳ヲ。後に種く沿革して。繁衍せる説も入來り混ぜ。故に未しき倫も。この思ふよぞ有りける。故今この説に本ぎき。彼国古代の律度を。論ひ定めむとは思へど。此ものも。中くに混らはしきれば。別に赤縣度制考と云を著して。委く辨へ示ゐを俟ぶし。

ちて此り大寶令をり始めて。次くに度量の事も見えるに。御文等を擧て。いと外蕃も制に據ひ給ふ。非ぞ。皇国の尺度も神代よ。固有の物ヲ。其以來都て變革ぬき由を。論らひ定めむとは。但し文義の上ヲ。紛らはしき事も無ふは非ぬど。其物実に於ても。少ろも違ふこと無し。其も次くに云を見よ。

凡度十分爲寸。十寸爲尺。十尺爲丈。一尺二寸爲大尺一尺。

国立国会図書館　タイトル『皇国度制考 2巻』　請求記号 839-51
ガラス使用

度地用大此外官私悉用小者度地五尺爲歩二百歩爲里。

此は文武天皇の大寶中ふ勅撰あ卍し雜令中の文ふり乃御紀ふ大寶元年八月癸卯遣三品刑部親王正三位藤原朝臣不比等撰定律令於是始成二年三月乙亥始須度量於天下とあり。此大宝令の成きる由來は既ふ古史徴開題記北秋巻ふ委く説さ卍就て見る法し是等は事ぞもは固をり天下了知傳ず し事ふは有れきぞ今新ふ令ふ載られさる制ふは故ふかれ須ち知し兒給ふれり斯て元明天皇紀ふ和銅六年四月須下新格及度量權衡於天下諸國とも見り大寶二年より十一年後ふ卍按ふふ此は大寶二年ふ已ふ始兒て天下ふ須ち給ず きぞ諸國了は尚

屆らぢる所も有卍し故了新格を須下し給ふふ添ず給むし ぞ聞え多り。因ふ云はむ是和銅六年の紀了二月始制度量と有るむ訛文ふり然るむ是より十三年さ兒大宝元年ふ既ふ大宝令の奏上あ卍其二年の紀ふ三月乙亥始須度量於天下と有るを聞もふく又更了始兒て何の度量をり制し給はむ此む其四月ふ度量を須下し給ず るふ卍訛きは衍文ふるこぞ論ひれし然る了後学この義を悟ら兒大宝令ふ定め給ひし称尺を此時はじ兒て唐比大尺多常用と兒べく改制志給ずふり と説さる人も有きど然らバ令の文面をも其称尺ふ改め兒む有まじき事ふるふ其偽了世ふ傳はり令集解はさは沿革をバ能く論ふ書れきぞ然る説とてむ絶ふ有ることふむ を以ても此は衍文ふる事は曉はべきれ卍。然るふはと元正天皇紀了養老四年五月癸酉須尺様於諸國と云へは事あ卍和銅六年をり七年後ふ卍此む神の御世ふり舊く用ひ來れる度量ふきば何時ぞれく少ずの比長短も出來了當

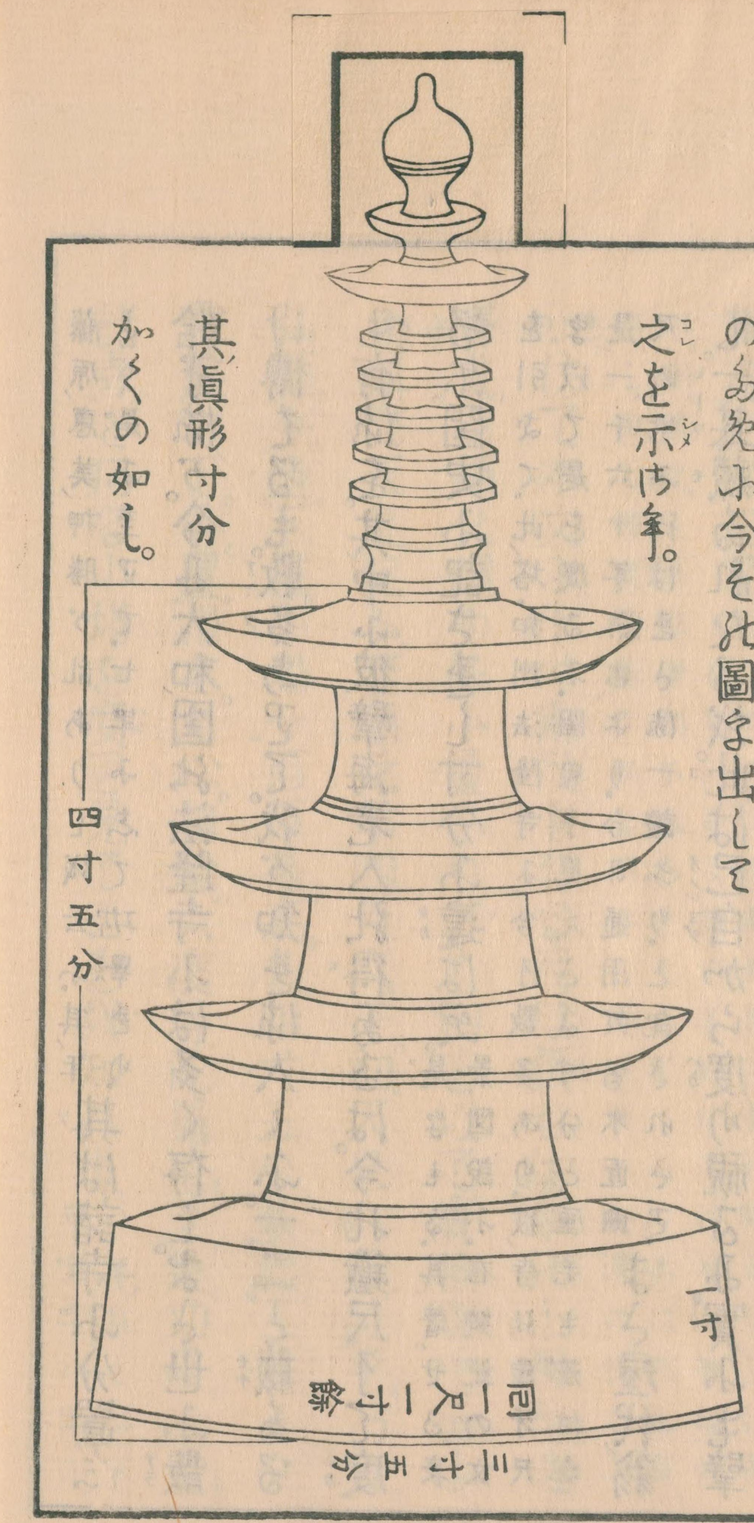
時正し給へる度量ゐ差ある訛ゑれ有りし故ゐ本様を須ち給ふ法ゐや有む雑令ゐ凡用度量權官司皆給様其様皆銅爲之ゑてゐゑ。この比度考ゐ南部新書ゐ唐の開元令を引きて在京諸司及諸州各給秤尺斗升合等様皆以銅爲之とあ法唐制ゐ依らきしゐゑと云へり。ゐは然も有ざし。但し律度量衡ゐ銅を用ふる事は早く前漢の律志ゐ見め。ちて本文ゐ十寸爲尺ゑ有る尺は謂ゆ法今比小尺ゐ。廣成宿禰比謂ゆ法小量ゐり其ゑ何を以て實檢ゑゑ云ふゐ。稱德天皇紀ゐ寶龜元年四月戊午初天皇八年亂平乃發弘願令造三重小塔一百万基高各四寸五分基徑三寸五分。露盤之下各置根本自心相輪六度等陀羅尼至是功畢分置諸寺とてゐる小塔を度ゑ見てこき我知れり。八年亂とは天平宝字八年ゐ藤原恵美押勝ゐ乱ありし我云ふ其年より是ゐ至ゑて七年ゐ志て功畢きり。其は諸寺ゐ分置ち給ゐ法ゐゐ今ゐ大和国比法隆寺ゐは多く存しゑゑ世ゐ散け傳ちるも數多あゑて我ゐ知き法人くゐ一二と藏ゐる も有法を其中ゐ彼壁海老人比得ゐるは今比鐵尺ゐて度る ゐ国史ゐ記さきし寸分ゐ違はゑ。是も亦其著せる表を引ゐて此塔和州法隆寺ゐ今ゐ數多あり彼寺比象牙尺景図説ゐ右続紀の文ゐ以て是を度るゐ国史ゐ見えさる寸分と厘毛も差は亦是一千六十年の古より今ゐ通用ゐる木匠曲尺の世ゐ行はきさ法一證ゐり。と記されゑ。ゐ屋代翁も一基藏ゐれた る我此は已自から度ゐ視るゐ實ゐも壁海の云きさ法ゐ如し。ゐバし此を狩谷望之も三基藏さる我其攷ゐ作きる曲尺九寸七分ゐ當る大尺といふ器をもて度さ法ゐ合ゐれバ宝亀の時ち此大尺を常用と爲ゐるこゑ明ゐりゑ其著せる度攷ゐ記せ

国立国会図書館　タイトル『皇国度制考 2巻』 請求記号 839-51
ガラス使用

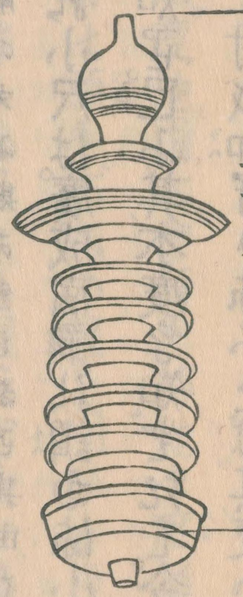
ほゝ甚く心得ずさし。已親しく度ゐ視む。決めて其謂ある大尺ゝ餘り。必ず今の鋏尺ゝ差ふこゝ。有はおくゝ所思ゆ。ほゝ。ゝれゝ度攷ゝは。非説ども多ゝ。るを。其も下巻み辨ずるを俟べし。

の名ゝ。今それ圖を出して之を示ち。

此小塔を見知らぬ人



其眞形寸分かくの如し。



此ハ塔ノ上ノ方ヲ拔放チ見タル処ナリ摠躰鏇車ニテ挽タル物ト見ユルガ其巧ナルコ目ヲ驚サリ木質ハ樫ニヤト思ハルサレド莫大ノ數ナレバ悉ク同様ナリヤ其ハ知ラズ寸分ノ外ハ用ナキコトナレバ委クハ記サズ

抑寶龜元年は。この比尺様を。天下ゝ頒ち給ふ。法養老四年ゝ。ゆ僅ゝ五十年後ゝ。して。令制盛ゝ行ゝ。ときし時形る。其時ゝ造らせ給へる。此百万塔の寸分。かく鐵尺ゝ符合ゝ。法上は。官私悉用ゝ小者とあゝ。法小尺ゝ。今在る鐵尺の度れる。ゝ。火。我見ゝ。法如く著明ゝ。ゆ。然れゝ。ゝ。ほ傍證をも云ゝ。ゝ。是よ。ゝ。三十四年ゝ。ち。桓武天皇ゝ。延曆二十三年ゝ。上奏ありゆ

国立国会図書館　タイトル『皇国度制考 2巻』　請求記号 839-51
ガラス使用

志伊勢兩宮の儀式より宮殿及び御裝束に度を載さゐたり既ふ云ふ如く上古に制を失さゞ記せるふ其度今ふ相續して鐵尺あり今制の時毛し神廷に之を用ゐ朝廷より他の度を用らまむふは當時乃典故ふ必ず其由を謂ひて有まおく此の故本文より官私悉用小者とは載し給ふはじ物を也はさ是ふ依りて思ひ丶荷田在滿が度制畧考ふ本朝令の小尺も今に曲尺ありと云へるは能くも云へる言かりに已然まど此を唐の大尺を傳ひし物と思ひ違ふ義解の文ふ欺のましあり其由も下ふ論ふを俟べし此令に小尺は廣成宿禰に謂も依小量ふて今の曲尺あゐ事を知り已ふ其本度を知ず也も今の謂も当る大尺は其小尺ふ二寸に加ひさゐあまば其度ハ乃小尺の百二十分を百分

ふ刻ず当尺ありと云ふ也隨ひて思ひ定ず也ら依斯て本文ふ度地用大也有まに移地を度当りに用むしふは非ず絹布に類毛亦古の尺を用ひさゆ是を以て今も曲尺の一尺二寸あ依尺を呉服尺也云むはさ量地尺と毛云傳ひあゆ

是も既く在滿が度制畧考ふ本朝令に大尺も今の呉服尺あひと云ひ貞幹が好古小錄ふも令の大尺ハ今に呉服尺れり也云へり此は共ふ動あひ說あるの在滿は此を高麗の度地尺を傳へさる尺といむ貞幹も唐に大尺を傳へし尺と爲さひ在滿が說も彼度攷り令集解ふ引さる古記ふ令前ふ高麗尺ふて地を度れる事を載さ依を集解に作者誤りて令の時に事として令の大尺を高麗尺あゆとせし也羽倉氏是ふ惑ひるあり辨ひあ依如く非ひ也まさ貞幹が說り令の大尺も唐に大尺と云へるも非ふる由は赤縣度制攷ふ唐尺の事を呉ふ論ず依を見て知べし其も令に御撰の無ひし以前ふゆ此尺に有し事は孝德天皇

国立国会図書館　タイトル『皇国度制考 2巻』 請求記号 839-51
ガラス使用

紀ふ。大化二年正月甲子朔。宣改新之詔。其三曰。凡田。三十歩。廣十二歩爲段。十段爲町。段租稻二束二把。町租稻二十二束と有るゞ。此ふ擧さる雜令は本文ふ。度地用大度地五尺爲歩と有て。田令ふ。凡田長卅歩。廣十二歩爲段。十段爲町ゞと云ゞ。其本注ふ。段租稻二束二把。町租稻二十二束。と有ふ同なゞ以て知ばし。孝德天皇の御世ふ。一歩ゞ云しも。卽ち大尺は五尺ふめゝ故ふ。令とうく符合せるふり。然まゞ其大尺と云ふ名こそ。唐令れる名ふ類せれ。是も彼ふ効へふふ非げるふゞ著し。凡て皇朝の令は。李唐は令を摸さましふと。其令條の多く。唐律及び六典ふ合ゞゞも。全く彼ゞを用られあるふ非ざる事ハ。五尺一歩といふ語は。唐ふ同々まど。二百四十歩を畝ゞを爲ゞと云ゞ。は。旧の如く。三百六十歩は段と爲らまし。ゞを以てまを知べし。はゞ此尺ゞ絹布は類ふ用ひし事はゞ。はゞ元正天皇紀ふ。

養老三年五月辛亥。制諸國貢調。短絹。狹絁。麁狹絹。美濃狹絁之法。各長六丈濶一尺九寸。聖武天皇紀ふ。天平八年五月辛卯。諸國調布。長二丈八尺濶一尺九寸爲端。貢之れゞ布のめ。延喜の主計式ゞ。諸國輸調絹絁。各長六丈。廣一尺九寸。長幡部絁。長六丈。廣一尺九寸とあり。然まバ此頃も。絹絁の度の同ゞの巳ふふゞ知るべし。然るゞ法隆寺ふ藏ゞふ古調布あゞ。其端ふ。常陸國信太郡。中家鄕戶主。大伴部羊。調布進納。天平勝寶八年七月。と云ふ。ふ二十七字ふゞ巳ゞ云ふ。是布は端ふ書さる文は。頭及絲綿囊具註國郡里。戶主姓名。年月日。とある制ふ依まる。賦役令ふ。凡調絹絁布。兩端ふ。此布を親しく見さる人の言ふ。勝宝を宝勝ゞ書誤めて在ゞと云ゞ。藤貞幹ゞ好古小錄ふ。右天平八年は紀を引き。此調布の事を記して。其濶さ。令は大尺一尺九寸あゞ。布帛ふ。

国立国会図書館　タイトル『皇国度制考 2巻』　請求記号 839-51
ガラス使用

大尺を用ゐる明證と云ひし。大尺は呉服尺の名あるも舊
説事を見ると云へり。此れ實に然は説なり。其は右の如く。國
郡年月姓名を記して。官に納めし正調布なればなり。凡て絹布
の類。かく正調の品なりしは其。世の尺度の證とはなる
も。假令その世の品なりとも。推あべては證に取ごされ謂
あり。其れ同じ太さの經緯を用て織あらむも。織人の手く
せに依り。まさ糸の糊加減に依りて。廣狭を生じて。一樣に
織得むことの。難きにあらば。官に納むる絹布をさそ。努
めて。其制度乃分寸に合せ給へ。其他の無數に織出る絹布
は。恐く制度の如くは。整ひ得ざるも非ず。其れ今の世の絹
布の幅を。大工の法にて。壹尺三寸と定め置給ひきと。世に
むさく絹布の幅の一樣なるに。廣狭あるに準へて知ることなり。けて右の如く。文武天皇の
大寶元年に。令の御撰畢りて。二年に始めて。天下にそれ度
制を須ち給ふ。其より百三年のち。桓武天皇乃延暦二十三

年八月に。伊勢兩宮の儀式を。注進せしめ給ひ。然るに其
儀式の度制を檢ずるに。大寶令の制度に違はず。是をもて
令前は更なり。令後に度量の變改無りしをも知らず。然
て其延暦二十三年より。三年のち。平城天皇の大同二年に。
造式の事を思し立せ給ひて。齋部家に傳へる故實を召問
あり。し故に。廣成宿禰。その氏上として。求訪の忝を歡び
て。古語拾遺を奏上しぬ。舊來の鬱憤をも述らまゐ。此等
の事は。古史徵に開題記。古語拾遺の論に。委曲に説あまた。今更に云はず。其の中に。大殿造り
の事。其家の專に職掌ある故に。其故實をば。殊に力を
入まて書著はし。殿營り制ては。もは天御量に本づく事

国立国会図書館　タイトル『皇国度制考 2巻』 請求記号 839-51
ガラス使用

ふは故ふそれ御量ふ大小ある事ふも及ぶるあれ然きば今の大小尺を每り天御量の度に因循ふ給ふるおを更ふ論むを俟まじ如物ふゆ。此はふほ上れ條くふ論ふは事等を立却りをく視て能れ思ふ法きふゆ。けて此大同二年をゆ二十六年のち淳和天皇れ天長十年十二月ふ令義解の奏上有しるを大寶ちれ以來ふ〻ふ至るまで度制れ改革ふゆ事ふ云はを是より後ふ弘仁貞觀の式格有きを沿革ふしと聞も然るふ延喜れ雜式ふ凡度量權衡者官私悉用大但測景合藥則用小者を有るは後れ何ふは癡人の唐れ六典ふ凡積秬黍爲度量權衡者小度小量云ふ諸鐘律測晷景合湯藥及冠冕之制則用之内外官司悉用大者を有ふふ不採て何の辨ふ無く漫れふ書加ふし文れゆ。六典の此文ふ南部新書ふ開元令と引さきば六典ハそを取りて記せはふゆ然る ふ今人或は雜令ふふ地を度るふれみ大尺を用ひ其外は悉く小尺を用ふはき制れれし ふ後ふ制を改ふて大尺ふ常用と爲れしふゆと云はも有きを若ち ふ有ふば式の全書中れる諸物の度量稱を用ふる文を も皆改ふは得有まじれ事ふるふ皆舊れ儘形はふ如何そは延曆れ内宮儀式ふ大御神れ御樋代の度を深一尺四寸徑二尺内一尺六寸三分と有はを大神宮式ふ毛樋代一具正宮料高二尺一寸深一尺四寸内徑一尺六寸三分外徑二尺をあゆ是ふ準ふて餘ゆ

の度量を毋ふ古ふ小違はざることまさ右文は攙入ふ故事をも辨ふ忍し。ふ右雜式の文ふ就ては彼度攷ふ殊て甚じき强說あり。其れ下卷の末ふ論ふ俟べし。けて右は攙文は掃ふ除ふば。乃天御量は大小量令ふ謂ふる大小尺神世を卫ふて。今日ふ至ふまゞ都て改變あ故事れく。兩用せるふを明ふり。何ふ尊ふ事ふらずや。和名抄木工具ふ辨色立成云。曲尺麻可利加禰を伺るは。小尺ふ云ふ裁縫具ふ。辨色立成云。尺竹量也。太加波可利と有るは。大尺を云ふ。其れ小尺は。鐵ふ勾げて作ふを以て用ふ形し。大尺は裁縫を度地とふ用ふれど直ふ長ては用をふさば。是を以てかく名ふし形卫。但し竹量と云ふて作ふ故の名ふれば。大尺ふ限ら

ず。小尺ふ限ふも。竹にて作ふるを。竹量と云ばきハ勿論ふれど。此を大尺と云ふは。何ぞや思ふも有べきを。和名抄ふ木工具ふ曲尺ふ出し。其ふ相對して。裁縫具ふ。竹量ふ出せふ。大尺を度地のみふら。裁縫ふ用むさる故実ふ合ふばふり。斯て二十卷は和名抄ふ。竹量の條ふ。那本魏武雜物疏云。象牙尺と云。る文あり。是ふ依りさゆと見えて。太子傳玉林抄といふ物ふ。法隆寺ふ太子尺の小尺ふるをも。歌ふタカバカリを詠さり。然を竹量と云名を。を大尺ふ云ひしの。後ふは大尺れ長を。を。まさ尺の枝ハ何おても。勾ふ直ふ作ふる。は竹量を。ぞ云ふむ。けて皇国固有は尺度ふ。大小あふ。赤縣唐代の度ふ。大小あ卫しふ相似ふれば。大寶令は撰ばせ給ふ時ふ。文人さち。唐令ふ取卫て。文章は成しのぞ。文面ふふ。自からふ。彼ふ制を襲ふふ如く見ふるふ。況て天長の時は義解ふ。分者以北方秬黍中者一之廣爲分秬者黑黍也と云ふ。正ふ唐の雜令ふ。度以

国立国会図書館　タイトル『皇国度制考 2巻』　請求記号 839-51
ガラス使用

秬黍中者一黍之廣爲分云々。之有る找取りて書さ法故ゑ。
眞古學ゑ知學者等は。是解ゑ扇惑せられる。偏頑ゑ。唐の摸
制と見形し故ゑ。其方ゑ知み說僻むまぞ。皇朝の小尺。あゑ
秬黍百粒をもて作し得べき度ゑ良多や。義解は文者ゑち。
已ゑ故實を忘られし故ゑ。かく後學を惑はしむ法。非說を
ゑむ載さまゝ法。其を此一事は知みゑ非ゑ餘事ゑ毋往く然
る古義を得ぢ当說等あめ。其いと近きゑ必しを一ト故云、む
所の義解ゑ於京城四隅道上而祭之言欲令鬼魅自外來者
不敢入京師故頒迎於道而饗過也とあるは故実ゑ叶はぞ。
其を道饗祭ゑ祭る神ハ三神あめて八衢ゑ在して鬼魅を
塞遏むる神等ゑ法故ゑ四隅道上ゑ。此三神を饗し祭当
事ゑこそ有まを鬼魅をちく迎ゑ饗して京師ゑ入ゑ必と
と云る祭ゑハ非ゑ。そは祝詞式ゑ出さる道饗祭詞を見て

著き事れ当を義解は文者さち其漢学は力こそ有りめ能
く皇朝の古始を知ぢりし故ゑ此等の事をさゑ誤れる
ゑ。

○世ゑ吳服尺裁衣尺上ゑ云る物とは異ゑり。まゑ鯨尺とも云て鋏尺
は一尺二寸五分を以て一尺ゑ爲さ法度ゑ。今は布帛裁
縫の事ゑは多く用ふれども其餘ゑも用ふる事れく公より頒布し給
ふ物ゑも非ゑ本は高倉家ゑて私ゑ用初らまゑ法物ゑ。
ぞ。くじら尺と云義別義あるゑ非ゑ鯨の鰓もて作れるも有法故ゑ云由ゑり。此尺を廣く用
ゆる事ゑ成ゑ法を去し寛文五年ゑ布帛は長を此尺ゑて。
二丈六尺ゑ定給ゑ事ゑて今ゑ百七十年許の事と見えさり其
以前は何事ゑも鋏尺を用ひゑと見ゑ。今も諸国ゑ吳服裁衣ゑも鋏尺ゑ

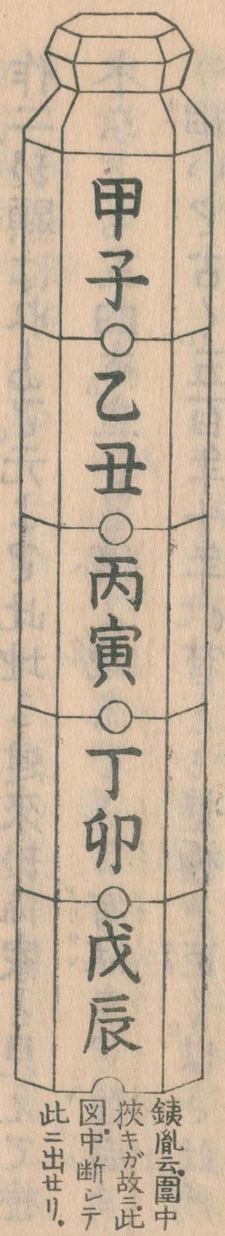
国立国会図書館　タイトル『皇国度制考 2巻』 請求記号 839-51
ガラス使用

用ふる処少らず。ちて此尺は。近く制出さゐ物ゐは有れど。赤縣れ制ゐ據れ法ゐ非ず素ちゑ皇国の眞度ゑ依て。作ゑ法ゑゑ疑ゐし。然るを鋏尺の。四分一を増さるゑて。眞度ゐ合へる物ゐれざれり。今は此尺度れ弘まゑゑ法ゑ故ゐ。中古ゑ謂ゐる大尺一尺二寸の度制。を行ハゑぢるで如く有ゑゑゑゑ。猶この外ゐも。一ッ二ッ有る由ゐゑど。何れも私用の物ゑて。廣く用ふ法ゑも非ざゑど。論ふ迄も。れき事ゐゑ。○ちて赤縣州れ尺度の起原は。前ゑ云へ法如く。其古尺れ元を疑ゐく皇国れ神眞の彼處ゐ君師とを。て馭戎ゐ給ひし時ゐ始まりて。世く沿革せる物れる事論れし。赤縣の外。諸蕃国れ事も。準ずて辨ふ法し。其由は。赤縣度制考ゐ。委く論ふを見て知る法し。

○去ゐし文化十四年丁丑歳の。六月六日れ事ゐ法ゑ。吾ゑの殿れ領知ゑ。出羽国秋田郡比内脇神村の枝郷。小勝田村れ地を流ゐ法。米代川と云川ゐ。洪水れ出さゑしゑ。其村居の畑地ゐて。川ゑと六七間通ゑ。川缺て成ゐるで。土中ゑゑ。家作二ゑ顯はれゐゑ。元ゑゑ此地ゑ建來ゑ法家と見えて。樹木ゐども三四本。立さる儘ゑ。埋まゑさる有狀ゐゑ。屋造めの相い。ゑ古く。五百年千年れ昔とも見極ゑ。巨くはさ此所ゐ家ゐゑゑゑと云古とは。此邊めの老人も聞傳ふる事れしと云へめ。ちて其家れ内ゐ。種くれ器械ど。ゑ有ゑ法中ゐ。予未曾て見知らざる。一ゑの器物ゐゑ。其狀尺度。まさは土圭

れどの類ふやと思はる。故今ちゝふ出して。識者れ考ふを俟むやに。其圖左れ如し。

長凡テ一尺一寸三分。杉ニテ六角ニ制リ。六面ニ干支ヲ記スコト。図ノ如シ。



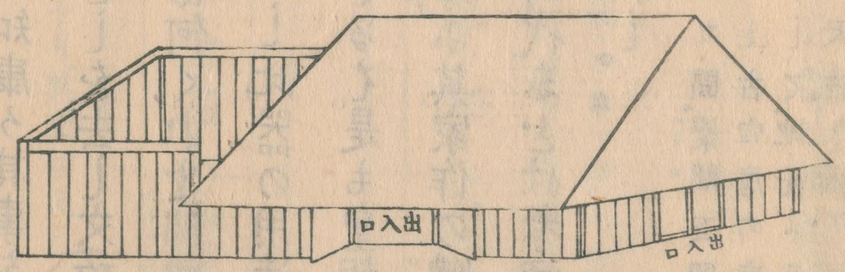
右は秋田れる弓ご學友岡見順平知康ゞ。其事を親しく見聞ある儘ふ。自から圖記し置さアしを。去し文政四年三月廿三日ふ。其本を借て寫取ゆはあ何くれゆ問聞さアし趣をも。合せてちゝふ載せるあア。但し此器の用法れ未考ふ得ざれど。其寸度れ鋏尺ふ違はざるれ。是も皇朝古尺の一證ふ。備ふぼき物あアかし。○今序ふ其家作の體相及び器械ゆもれ形狀をも縮寫あて。其時代あどれ考證ふ備へむとに。知康ゞ記し置さる所左れ如し。

二ツ於の家大小ふのゆ。大きある方。桁間九間。梁間五間あり。小き方を。桁間六間。梁間三間れア。実ふ上古穴居の家とも云ふべくや。今の屋造りとれ。大き異ふして地面より軒端の高さ。僅ふ二尺五六寸。家の内。地形四尺許り掘下げさア。板敷

国立国会図書館　タイトル『皇国度制考 2巻』 請求記号 839-51
ガラス使用

あし。四方ハ窓の如き出入口あり。左右開キ戸ハ。一枚ハ割板扉あり。其下ハ四尺餘の階子あり。此ヨリ出入ニと見えさり。屋根ハ割板を敷ならべ杉の皮子葺き。其上ハ。泥ハ土厚さ二寸五分程塗り挂ケ。今の民家庭臺所とも云べき所は。板屏ハ如く割板ハて。高さ七尺許ハ圍ひ。屋根ハど。外地面並ハ建るハて。さて柱。桁。梁。扉ハ悉く杉の割木ハて。少しも朽ハく見え。釘ハ。ひ。ハ。ハ。等の鍛具ハ。一切ハし。さて此地ハ。人家ハ埋まて。ハは。幾百年前の事ハ。知ル者ハし。但し土人ハ口碑ハ傳ふる。説ハあ。ハ。ハは悉くハ信。ハ。ハは。ハ。ハ。事長けれハ。愛ハ略記。

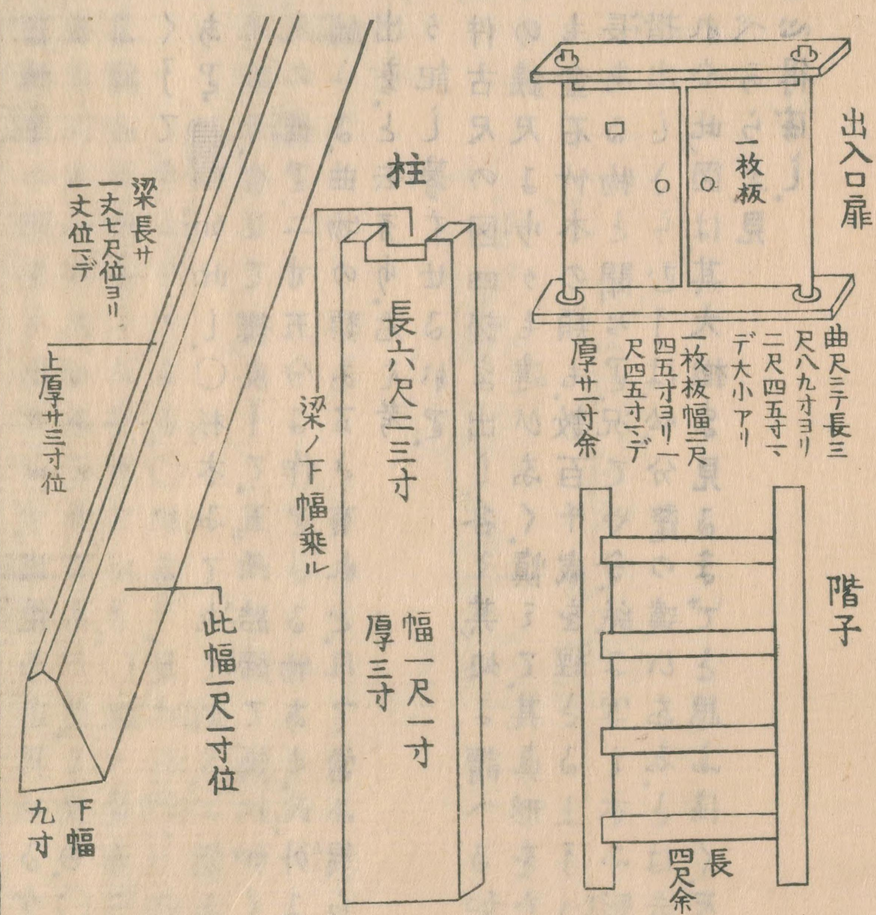
文化十四丁丑年六月　秋田人　岡見順平記



鍛亂云。軒端ヲ低ク作レルハ。出入ニ宜カラズ思ハルレド。雪多キ処ナル故カ。一タ若クハ。出入ノ処バカリ穴ノ如クニ。土ヲ掘クボメタルモノカ。然ルハ古哥ニ。妹ガ家ノ波比入ニ植ル青柳ニ云ヘ。一タ。柴ノ屋ノ。波比理ノ庭ニ云ヘナド有テ。入口ヲ。ハヒリクチト云モ。由アリゲニ聞ユレバ。古ヘノ民家ハ皆カクノ如ク作レリシ物カ。猶ヨク考フベシ。

予猶委ク。此家作の狀を問ふ。二ツとも。大抵同じ造方と見ゆ。されど審ふ見分ケ。さて処々大凡を図しる。と云ふ。

○予嚮ふ。此古材を少の得さるゲ。正目杉目ハ糸目ハて。色ハ藍鼠の薄色ヲ似さ。此ハ年久く。土中ハ在し故と見ゆ。



国立国会図書館　タイトル『皇国度制考 2巻』 請求記号 839-51
ガラス使用

839
2
51

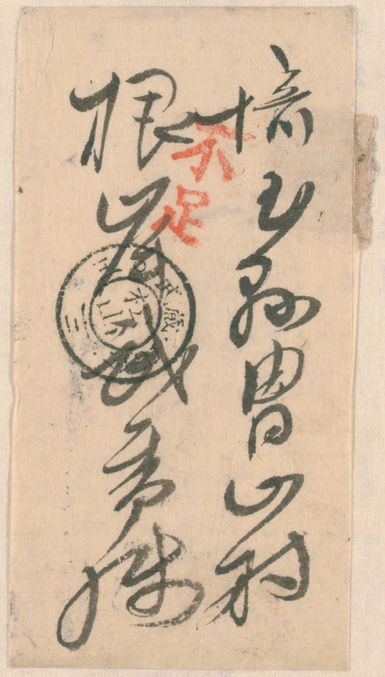
ちて有ける器械等の図をも出せるが機織の道具ありがち中ふ梭大く長さ二尺八寸五分あり糸目あど付て見也○木履あり前鼻緒の付所少し片寄ゆてあり○鍬の臺あり。

此の如くして今より大ふ○机あり足れ形此の如し○櫛あり如此し○杉木ふて就く削り二割ふ右て内をくゆ取り合せて櫻皮して五所結締て筒れ如く長二尺五寸九の徑二寸五分ふ作る物あゆ此外ふ櫻の皮ふて縅さる曲物の類あるさ有れど凡て常ふ異らざるは記し出ぎと云ゆ右を考證れ爲ふ少し記し著せる外ふ。

○鋏亂云上件古尺の図四ふ出し各く其処ふ謂へる如く其分寸今の鋏尺ふ少しも違ひふく慎て其眞形をで寫しされども金石竹木の類も數百千歳を經さる上ハ少しふ縮長ある物と聞ふ況てや今紙ふ写し木ふ彫て數百千枚揩出しさらむはふ分聳の違ひふ右とは云可のらぎ然れど此図は其大概ふ見るまでと思ふぼく尺様ふは用ふべのらぎ見む人此旨を心得ぼし。

国立国会図書館　タイトル『皇国度制考 2巻』 請求記号 839-51
ガラス使用

839
2
51



ちて有ける器械等の図をも出せるゞ。機織の道具のるゞ

尺云脚ハ。で如　　らよ。く。ふ此り。○

国立国会図書館　タイトル『皇国度制考 2巻』 請求記号 839-51
ガラス使用　挟み込み物

839
2
51

ちて有ける器械等の図をも出せるゲ。機織の道具ハタオリのゲ
ト。経タテ・緯ヨコ・長さ二尺八寸五分あり。糸目おど付キて見也。○

国立国会図書館　タイトル『皇国度制考 2巻』 請求記号 839-51
ガラス使用　挟み込み物

国立国会図書館　タイトル『皇国度制考 2巻』 請求記号 839-51

ガラス使用